上毛金石文年表

復刊版

上
毛
金
石
文
年
表

群

馬

縣

群馬地域文化振興会

上毛金石文年表

群

馬

縣

正誤表

場所	誤	正
<p>1頁 銘文欄 三行目傍註 5頁 備考欄 三十一行目 同 7頁 銘文欄 五行目 7頁 銘文欄 十行目 7頁 備考欄 十行目 35頁 備考欄 十二行目 58頁 備考欄 十三行目 59頁 銘文欄 二行目 61頁 銘文欄 三行目 64頁 銘文欄 二行目</p>	<p>(可カ) 大日外三 即ち四佛 利未代衆生 抑者断悪 建長□□ 竜集は初秋の季節名 今月今日を書く 時國天 虚空藏菩薩 弥勒菩薩</p>	<p>(石) 大日外四 即ち五佛 利未代衆生 抑者仰者断悪 建長□□ 竜集は歳次 今月今日と書く 持國天 虚空藏菩薩 弥勒菩薩</p>

群馬縣史蹟名勝天然紀念物調查報告書 第四輯

上毛金石文年表

昭和十二年三月

群馬縣

序

我が上毛の地は實に古來東日本文化の中心であり、武門制覇の時代に於ても、尙よく武相二州と相並び、東國文化の維持に是努めたのである。吾々祖先の偉大なる文化活動は歴史の證する處であり、其の文化活動の活舞臺は上毛の土地其のものである。即ち祖先の貽せし偉業に觸れ、其の精神に接するには遺蹟遺物の探究調査に如くものはないと信ずる。本縣に於ては之が資料として既に報告書刊行第三輯に及んでゐるが、今更に史蹟名勝天然紀念物調査報告第四輯として上毛金石文年表を刊行し、以て一は祖先文化の理解に資し、一は郷土史研究の一助たらしめんとする次第である。

本年表は本會臨時委員群馬縣囑託相川龍雄君多年に互り苦心輯録せる資料に基き、更に同囑託尾崎喜左雄君をして實査檢討せしめ以て編纂を終了するに至つたものである。

今茲に上梓に際り各地有志の援助を謝すると共に編纂者並に之が編纂事務の運行に努力せる本會書記群馬縣屬吉澤澄治君同堀川定夫君等關係者一同の勞を多とするものである。

昭和十二年三月

群馬縣史蹟名勝天然紀念物調査會長

川

崎

勇

目次

序

目次

圖版目次

解說

上毛金石文年表

金石文資料時代別一覽表

圖版

圖版目次

- 第一 推定泰始元年銘鏡拓本
- 第二 延曆廿年銘多重石塔
- 第三 仁治四年銘阿彌陀如來鐵像
- 第四 同阿彌陀如來鐵像背面銘
- 第五 建長三年銘不動尊石像
- 第六 同不動尊石像胸墨書銘
- 第七 建治二年銘多寶石塔
- 第八 同多寶石塔基臺底面銘拓本
- 第九 正應五年銘洪鐘
- 第十 延慶二年銘板碑
延慶三年銘板碑
- 第十一 元亨三年鐵燈籠銘拓本
- 第十二 曆應四年銘多寶石塔
觀應二年銘寶篋印塔
- 第十三 觀應二年銘多寶石塔
貞治五年銘多寶石塔
- 第十四 貞治三年銘五輪型梵字板碑拓本
應安五年銘畫像板碑拓本

第十五 至德三年銘傳新田義季木像

應永卅四年銘阿彌陀如來銅像背面

第十六 明應七年銘石燈籠

大永三年銘石燈籠

第十七 永正四年兜の前立銘拓本

永正十七年銘五鈷杵

第十八 天正十四年銘懸佛

同懸佛裏在銘面

以
上

解 說

相 川 龍 雄

一、本縣内に現存する紀年號の判明せる金石文を集成し、之を年表形式に整理して各々番號を附し、各個の檢出檢討に便ならしめた。

既に本縣の金石文に對しては市川寛齋の「金石私志」を甫め「上野名跡考」「上野名跡志」「山吹日記」等の地誌紀行文中に各々三十有餘紹介されてゐるが、説明の簡單種目の漠然、解説の臆臆、所在地の明瞭を缺くもの等あり、現在の學界よりすれば不備の記述たる非難は避け得ない。

然し乍ら徳川時代及び明治の史學の黎明期に於て、山野古刹を探訪、草木を分けて掃苔手拓し、飢鼠彷彿する須彌壇上に掃塵法體を檢出して考究せる先人の功績は讃仰を禁じ得ない。

之等先人の辛苦發表せる尊き資料を再び實地探訪し、寸法、胎質、銘文、山來を認識し、正確に歴史上の價値を知ることが緊急と考へ、出来る限り探訪したが時間の都合上調査不能のものも相當にあり遺憾に堪へない。

尙先人の努力紹介せる以外に幾多の資料が草木に隠れ或は土中に埋没されてゐるか判らない、之等の新資料の檢出は各地の郷土史家有志と協同し全面的に調査をすゝめ、次の機會に本年表に集録完璧を期したい。

一、本縣内に現存せずとも上野國名上野國人名の記載あるものは集録した。(五)(六)は大和正倉院にあるも本國人の租税として納入せし織物であり、奈良時代の國家經濟を知る好資料である。(三四)(四八)の洪鐘は前者は長野縣、後者は埼玉縣に移動され、後者の如きは明らかに室町時代の戦亂の折に掠奪されたものなることが追刻の銘文にて知れ、當時の關東の狀勢を物語る好資料である。

(一一〇)の鰐口は大洪水の爲に流失し下流の泥中より發見されしもので、天災地變を語る資料である。

(一二一)の經筒は本國人が六十六部となつて諸國を遍歴して殘した信仰の行蹟であり、室町時代の佛教を知る好資料である。

反對に他國より本縣内に移入したものの、他國人の造立本願になるものを見ると、(二二六)の板碑中に秋平二入道、高麗景吉等の武藏國住人の姓名が記してあり、(七〇)の金銅棟札では足利尊氏が造立主なることが判り、(一〇六)の鰐口は武藏國地藏堂の宗慶が願主となつてゐて赤城山地藏堂との關係を物語つてゐる。

(二二二)の銅造阿彌陀佛も武藏國太田村の七人の禪宗僧侶に依つて造顯されたことが記してあり、(二六一)の洪鐘も武藏國人が本願となつて居り、(二七三)の鰐口も武藏國秩父郡の立存なる人物が本願となつてゐる。(一七五)の棟札は樂師堂を美濃國住人が本願成就の爲建立したものである。

以上年表中より摘記したが、武藏國との關係が最も多いことは、利根川を隔てて南方に接してゐるから、古くより政治經濟宗教等最も密接な關係にあつたことが文獻以外金石文に依つても更に十分察せられるのである。

一、年表の記載順は最古のものより(一)となして順次に番號を記し、第二欄に實體の種目を、次に皇紀と干支を、次に銘記を次の第五欄に現存個所を記し、發見地の異なるものや移動せるものは極力調査して竝記した。前述の地誌、紀行文、報告等に依るものの内には果して現存するや否や疑問のものもあるが、他は凡て所在を明らかにし得たので調査探訪の便を思ひ小字まで記した。移動し易い金石文の寫帳とも云ふべく、遺物の紛失、損傷、移動等の防遏の意味に於て、所在地の鮮明は重要視さるべきである。最後の欄には實體の寸法、銘文の簡略な説明、考證の要點及び先人の研究した文獻等を記したが、不十分の點多く御叱正を仰ぎたい。

一、板碑は紀年號の明確なるもの本縣内に數百基あるが、本年表中には畫像のあるもの、異形のもの、銘文のあるもの及び特殊の種子を有するもの等を更に選擇して記載した。

一、(一七九)の神名帳及(二二二)の經卷は金石文とは云へぬかも知れないが、一は本縣神社行政を物語るものであり、一は一ノ宮貫前神社の廢佛棄釋の折危難をまぬかれて現存せるもので、總社神社、貫前神社の歴史的地位に鑑み特に記載したものである。

一、紀年號が例令古くとも後世の造立なるものは當時の遺物でないから追福のため造立したものであるも盡く除外した。佐

波郡名和村泉龍寺那波城主大江宗廣墓標「應永二十一年九月七日七十二歳寂」、新田郡太田町金龍寺新田義貞公墓碑「延元三^{戊寅}寅寅年閏七月二日」の二つはその好例であり、前者は徳川中期、後者は寛永十四年造立である。

一、銘記があつて明確な遺跡より出土し明らかに時代の推定されるものでも、紀年號なく絶對年代の判明せぬものは記載しなかつた。譬へば上野國分寺趾や山王、上植木廢寺趾及び日野金井、入野瓦窯趾出土の姓名及び郡名の記してある文字瓦がそれである。

一、卷末の「表」は慶長以前を七時代に大別し各種目の時代に於ける地位や消長を知らんとした。

大和時代は大化改新迄としこの期間に入るものは古墳出土の^(カ)泰始元年鏡のみである。他に紀年號のない銘文のみの漢鏡は多野郡美九里村三本木、山田郡矢場川村等より出土してゐるが記載しない。

奈良時代に入ると上野三碑及び屏風袋の五つあり、佛教も著しく發達し國分寺の建立もあり、他に廢寺趾も五六ヶ所發見されてゐるが、佛像佛具のその當時のものは現存してゐない。

平安時代の初頭延暦二十年の多重塔が數年前發見され、円仁の創始した横川如法經堂を溯ること二十數年に當り、東國佛教文化に一大光明を投じたのである。更に保延年間の鈴杵があり、承が少しく不明であるが承安と推定される懸佛が武藏國より移入されてゐる。以上の三者は共に赤城山麓の勢多郡であることが注目に價する。

鎌倉時代を平家滅亡後文治年間より後醍醐天皇の建武中興前までの百四十餘年間とすれば、初頭建久八年の懸佛あるも之れは疑はしく、降つて四條天皇の仁治元年の安山岩の供養石碑(一一)あり、之れが板碑の祖型であると共に本縣最古のものであるが、(一二)(一四)と大型の綠泥片岩の板碑も二年後に至つて北甘樂郡に二枚あるは見逃せぬと同時に、この地方の豪族の繁榮を知ることが出来る。

仁治四年には(一三)の國寶の阿彌陀像があり、建長年間には(一五)の不動の巨大なる石造彫刻があり、鎌倉武士の信仰の一端を知ることが出来る。

板碑は文永、建治に大形精巧なもの多く出現し、全部では本期に二十七枚に達し、畫像板碑も本期には六枚あり、鎌

倉時代は板碑の最隆盛期とみて好い。

洪鐘は鎌倉時代に斷然多くて五口あり吉野時代初期に一口、室明時代は二口である。

多寶石塔は國東式の塔身の瓶形になつてゐるもの多く諸所にあるが、紀年號のあるのは(三〇)の建治のもののみである。吉野時代に至ると隆盛になり八基あるが、皆齊しく北朝の年號を用ひてゐる。室明時代には(一五八)及(一六〇)の二基のみである。

五輪石塔は鎌倉時代のは(四九)の一基のみで吉野時代は八基で皆北朝年號、室明時代は五基で遙に減じ桃山時代には一基もない。

寶篋印塔は鎌倉時代のもの一基あり、吉野時代のもの十三基、室明時代二十一基で隆盛期を出現し、桃山時代には一基のみである。

棟札は吉野(但北朝年號)、室明、桃山各一枚づつである。

鰐口は吉野時代北朝紀年號のもの二個、室明時代は十一個、桃山時代が五個である。

六地藏を火袋に有し或は竿部に輪廻車を設けた石燈籠は鎌倉、吉野、桃山の三時代になく、室明時代に限つて二十一基もあるは禪宗の所産であるが、地獄信仰の土俗として地方色豊かなものである。

經筒は鎌倉、吉野、桃山の三時代になく室明に三つある。

懸佛は平安時代に一、鎌倉時代に三、吉野時代北朝紀年號に二、室明時代になく天正年間に四あるが、平安時代のを除いては皆本地佛である。

以上「表」に依つて簡單乍ら各種目の時代に於ける數量や消長を觀察してみた。

一、編纂に當り御援助を與へられた各地有志の御好意を謝し、特に本縣史蹟名勝天然紀念物調査會委員岩澤正作氏、同委員豊國覺堂氏、群馬縣師範學校教諭千々和實氏、勢多郡誌編纂主任原田龍雄氏、新田郡世良田村金子規矩雄氏竝に栃木縣史蹟名勝天然紀念物調査會委員丸山瓦全氏等の御懇篤なる御助力に對し衷心より謝意を表し尙今後の御指導を願ふ次第である。

上
毛
金
石
文
年
表

註

- 一、相川君の集解し、考證、解説を附せしものを實査し、或は拓本寫眞等に據り再調、尙隨時増訂したのである。尙符號 * を附したものは此際再調の違ひかつたものである。
- 一、板碑の詳細は群馬縣師範學校の調査中のものに譲り、寶篋印塔は尙無數に存在するのであるが其の一部に限り、多寶石塔も編纂上未掲載なものが多い。
- 一、銘文の行数、配字は原文に従ひ、文字は必要に應じ特種なるもの及略字を用ひ、他は概ね普通の活字に依つた。而して不明なるは□、不審なるは(カ)を附した。
- 一、印刷の都合上紀年に依る順序に於て月の前後したものが二、三ある。
- 一、社寺の所在は大字を以て止め、他は探求の便宜上小字、其の他出來得る限り詳細なるに努めた。
- 一、現在尋ね當らざるものは「今不明」、明に失はれしものは「今亡」を以て示した。
- 一、寸法、形式、材質等詳細を明せしも調査初期と末期に於て繁簡、錯雜となつた。諒せられ度し。
- 一、圖版は第一の鏡鑑及第十四の畫像板碑の拓本、第十の彌陀像及第十七の五銖杆の寫眞は相川君に、第二の多重石塔の寫眞は原山龍雄氏に、第八の多寶石塔銘の拓本及第十五の新田義季木像の寫眞は金子規矩雄君に、第十一の鐵燈籠銘の拓本及曆應四年銘多寶石塔の寫眞は縣社棧名神社に負ふたもので、茲に其の御好意を多謝する。

番 種 目	番 號	千 皇 支 紀	銘	文	所在地及發見地	備 考
一 神 獸 鏡	一一二五	乙巳	<p>□始元年陳是作鏡 <small>(本カ)</small> <small>(林カ)</small> 自有經迷□自前□ <small>(可カ)</small> 附地□出壽如金□ 保子□</p>	文	<p>東京帝室博物館藏 群馬郡大類村大字柴 崎字壁澤、圓墳粘土 塚中より發見</p>	<p>徑七寸二分。 白銅製、漢式鏡。 内外二區に分ち内區に神獸を現し外區帶圈中 に銘文を有す。 □始の年號に就ては學界論争の焦點なるも、 富岡謙藏氏の說に依り劉宋明帝の泰始と假定 す、因つて其元年は雄略天皇九年に當る。 圖版第一。 富岡謙藏氏古鏡の研究 群馬縣群馬郡誌</p>
二 多 胡 碑	一三七一	辛亥	<p>弁官苜上野國片墨郡綠野郡甘 良郡并三郡内三百戶郡成給羊 成多胡郡和銅四年三月九日甲寅 宣左中弁正五位下多治比真人 太政官二品穗積親王左太正二 位石上尊右太正二位藤原尊</p>	文	<p>多野郡吉井町大字池 字御門</p>	<p>總高六尺一寸七分、碑身高四尺二寸一分、幅 約二尺、額石高九寸、廣二尺九寸八分、臺石 二段上段高四寸六分、方三尺、下段高六寸、 方四尺。 砂岩俗稱「天引岩」。二段の方形臺石上に略々 方角の碑身を立て又方形笠型の覆石を載す。 六行八十字楷書體、藥研彫。 多胡郡新設の弁官苜を書けるもの、續日本紀 元明天皇和銅四年三月辛亥の條には三郡の郷 迄詳細記してあり、本銘文と吻合す。難解は 「羊」にて人名説、方向説、養字説、半字説等 諸説紛々であるが黒板勝美博士の方向説が穩 當と見られる。併最近に於ける多胡入野の舊 地出土「羊子三」及上野國分寺出土「羊」の兩 文字瓦に依る人名説も一顧に償す。 所在地に付き神軒小録に本郷村、集古十種に 眞井村とあるが何れも誤であり、又偽碑とし て群馬縣北甘樂郡高田村横尾壽平氏方、同縣 碓氷郡安中町臨江亭及福島縣喜多方町の三を 數へ得。 内務省史蹟精査報告第一 群馬縣多野郡誌</p>

三 金井澤碑

一三八六
丙寅

上野國群馬郡下谷郷高田里
三家子孫爲七世父母現在父母
現在侍家刀自他田君目頼刀自又兒加
那刀自孫物部君午足次瓢刀自次乙瓢
刀自合六口又知識所結人三家毛人
次知万呂鍛師儀(部)下君身麿合三口
如是知識結而天地誓願仕奉
石文
神龜三年丙寅二月廿九日

四 山ノ上碑

一四〇一
辛巳

辛巳歲集月三日記
佐野三家定賜健守命孫黑賣刀自此
新川臣兒斯多々弥足尼孫大兒臣娶生兒
長利僧母爲記定文也 放光寺僧

多野郡八幡村大字山
名字金井澤

多野郡八幡村大字山
名字山神谷(通稱山
上)

總高三尺七寸、碑身高三尺六寸、幅二尺三寸五分、臺石高一寸、幅三尺七寸五分。
安山岩。自然石。
九行百十一字楷書體。
卞贊に就ては下佐野の説穩當と見らるゝも明に「卞」である以上尙疑問を存する。然し高田里は下佐野定家神社附近とも稱さる。三家は屯倉、磯部君身麻呂は續日本紀に「天平神護二年五月甲戌上野國甘良郡人外大初位下磯部牛麻呂等四人賜物部公」とある牛麻呂と同族であらうか。

内務省史蹟精査報告第一
群馬縣多野郡誌

總高四尺八寸、碑身高三尺七寸、幅約一尺六寸、臺高一尺一寸、幅四尺一寸。
安山岩。自然石。
四行五十三字楷書體。

辛巳は天武天皇九年說、天平十三年說の二說何れとも決定し難きも書體、行文、金井澤碑に近似せるを以て天平十三年と假定す。集月は十月、十二月の兩說又斷定出來ぬ。

「佐野三家云々」は佐野屯倉の家系、新川は勢多郡新里村新川、大兒は同郡大胡町であらう新里村新川松原峰に奈良時代塔婆心礎を存し骨壺、古瓦の出土せるは注目に價する。放光寺に就ては上野國神名帳群馬東郡の條に「從四位放光明神」(總社本)とあり、九條家本延喜式卷十六裏文書に「定額寺、放光寺、伴寺依氏人申請不爲定額寺仍除放□□者」とあり更に群馬郡總社町山王庵寺陸出土文字瓦に「放光」とあれど放光寺址は尙未決定である。

内務省史蹟精査報告第一
群馬縣多野郡誌

五 楷布屏風袋

一四〇九
癸巳

上野國佐位郷戸主絶前部黒麻呂庸布壹
段廣二尺四寸長二丈八尺
天平感寶元年八月

奈良市
正倉院

墨書。年號の下に上野國印を捺す。
正倉院北倉十八番欄に納めらる。
佐位郷は同名の郡中に在り、今何處とも決定し難きも、續日本紀神護景雲元年三月の條に「乙卯（中略）上野國佐位郡人。外從五位上、檜前君老刀自。賜姓佐位朝臣」、同二年六月の條に「戊寅。以（中略）掌膳佐位采女外從五位下上野朝臣老刀自竝爲本國國造」とあり、其の本貫たりしものであらうか。上野志料集成には小保方村を充て地名辭書も之に従ふ、現佐波郡東村に當る。絶前部は不明。

石田茂作氏「正倉院御物年表と其の解説」（考古學雜誌十九卷一號）
丸山瓦全氏「正倉院御物中に存する上野關係の遺物に就いて」（上毛及上毛人一四三號）
相川「正倉院楷布屏風袋を中心として」（上毛及上毛人一四四號）

六 緋繩黃繩袷

一四一二
壬辰

上野國新田郡淡甘郷
戸主矢田部根麻呂調
黃繩一匹長六丈廣
一尺九寸天平勝寶四
年十月當國司正六位
上行介阿倍朝臣息
道郡司擬少領无位
池田市部足人

奈良市
正倉院

墨書。
正倉院南倉緋繩黃繩袷の雜裂七十一ノ60の黃繩に書入れあり。
淡甘郷は不明、上野名跡考は阿佐美に充つ、現新田郡笠懸村に當る。
參考書目同前

七 多重石塔

一四六一
辛巳

八 鈴

杵

一七九五
乙卯

東 光 院 永 巖 之	保 延 元 年 十 月 十 日	(面 東)	(面 北)	(面 西)	(面 南)	第一層 第二層 第三層
		靈 含 生 衆	母 父 祇 神	庭 朝 爲 奉	□ 經 法 如	
		日 十 七 月	七 年 廿	曆 延 輪	道 師 □	
		岸 彼 登 令	樂 安 得 永	生 □ 苦 愛	間 无 □ □	

勢多郡新里村大字山
上宇相窪

勢多郡黒保根村大字
上田澤
眞言宗醫光寺

總高一丈一尺四寸、幅六尺六寸。
安山岩、三重層塔。屋蓋は後補なるも塔身は一石造。
銘は各層四面に横書にて楷行草を交ふ。
道輪の履歴は不詳。
圖版第二。

柴田常恵氏報文(人類學研究)
千々和實氏山上多重塔研究
原田龍雄氏(山上多重塔銘の再検討)(上毛及上毛人二二三號)

總高四寸五分、周圍上部四寸五分、下部六寸。
銅製。
周縁に銘を針書す。
永嚴僧都は下野の人、俗に下野阿闍梨と云ふ、保壽院流開祖で醫光寺第六世、中興開山、仁平元年八月寂。